

## 優秀賞

テーマ1…医療と福祉、わたしの体験  
「かわいそうな女の子からの卒業」

東京都・渋谷教育学園渋谷高等学校1年 畑澤琉衣

私の人生は9歳の時に大きく変わった。それまでの人生も病気と無縁だった訳ではないが、手術をすれば完治したし、成長するにつれて症状は緩和した。ただ9歳の時に罹患した1型糖尿病という病はそうはいかなかった。

小学校4年生の夏頃から体がだるい日が多くなった。塾にダンス、水泳に英語、たくさん習い事をしていたからだの疲労だと思っていた。しかしその体の違和感は日に日に増していき、周囲の人からも最近疲れている？、痩せた？と聞かれる様になった。母も私の異変に気付き近所の小児科を受診した際には命が危険にさらされる状態になっていた。2019年10月25日、この日から私は1型糖尿病を罹患したかわいそうな女の子になった。

1型糖尿病と診断され1か月にわたる長期入院がスタートしたが、入院している期間には意外にも心は平穏だった。医師からは現代の医学では完治しないこと、生涯にわたり1日に何度もインスリン注射をしなければいけないことが告げられた。今までの様に薬を頑張つて飲めば、手術をすれば治る病気ではなく、私がどんなに頑張ろうとも治らない病気という事実少なからず絶望はしたが、入院中は医師の方々を始め、看護師、薬剤師、小学校の担任の先生と多くの人が早く日常生活に戻れるようにチームとなり支えてくれた。もちろん家族のサポートは1番の私の心の支えとなった。小児病棟には同じ病気で入院している子供はいなかったが、同じように病と闘っている子供はたくさんいて自分自身の境遇を嘆いたり悲観したりはしなかった。それよりもインスリンの点滴・注射により弱っていた身体がみるみる元を取り戻し、以前の様な活力が戻ってきた自分自身に明るい未来を描いていた。

1か月にわたる長期入院の末、無事に回復し、退院した私はすぐに日常生活に戻れると思っていた。しかし現実はそのなかに甘くなかった。日常的に襲われる高血糖・低血糖、常に気にしなければいけない血糖値、痛みを我慢して注射を打たなければ食べ物を食べられないという事実、私の心は次第に疲弊していった。そんな時に聞こえてくる「かわいそう」という声。治らない病気なんてかわいそう、注射を毎日打たなければいけないなんてかわいそう、体にたくさん注射の跡があつてかわいそう、そんな言葉を聞くうちにいつしか自分自身が自分の事をかわいそうと思うようになっていった。その結果、1型糖尿病を失敗したときの言い訳として自分の自分がいた。そんな生活をおくっている時に母が1型糖尿病の人が集まる患者会があるから参加してみないかと声をかけてくれた。あまり気乗りはしなかったものの、自分以外の1型糖尿病の人を見たことがなかったので少しの興味と傷を舐め合う気持ちで参加した。そこで私は衝撃をうける体験をすることになる。私と同じように小児期に1型糖尿病を発症した方の講演があつたのだが、そのテーマが「1型糖尿病との歩み、病は足枷か踏み台か」。この講演は1型糖尿病のかわいそうな女の子として過ごしてきた私には衝撃的だった。同じ病気を罹患していてもその病気を自分の強みとしている人がいるなんて。患者会に参加した後、それまでなんとなく避けていた自分の病気をネットで検索してみると、1型糖尿病でも病気を言い訳にせずやりたい事を続けている人、夢をかなえている人がたくさんいることを知り、私も治らない病気なら足枷として生きる人生より踏み台にしてやろうと決心した。もっかわいそうな女の子は卒業したいと。

今、私には夢がある。入院中に私を支えてくれた小児科の医師の様に私も小児期に慢性疾患を罹患した子供を支える小児科医になりたい。1型糖尿病を発症して良かったと思える日はこれからもきっとこないけれど、足枷として考えるのではなく私の個性・強みとして生きていきたい。